

YAMANOTE

2024
37

リハビリ科医師の紹介について

リハビリ科では毎週金曜日にリハビリ科医師、言語聴覚士で嚥下機能に問題がある患者さんに嚥下機能検査を実施しております。今年度4月から新たにリハビリ科医師が診療援助として勤務となったためご紹介させていただきます。

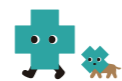
●梅森秀先生●

本年4月より北海道医療センターで週1回勤務させていただいております梅森秀と申します。北海道大学医学部を卒業後、整形外科を数年経験し現在はリハビリテーション科医として日々学ばせていただいております。北海道医療センターでは嚥下内視鏡検査を中心として嚥下障害に対する評価・訓練内容の検討などを主に行っております。経口での飲食は単に栄養摂取の面だけでなく患者様のQOL向上にも重要となります。患者様が誤嚥することなく口から食べられる手助けが少しでもできればと考えております。至らない点多々あるかと思いますが、よろしくお願ひ申し上げます。

●飯田有紀先生●

4月からリハビリテーション科にて嚥下障害の診療に携わらせていただいております飯田有紀と申します。嚥下内視鏡検査のため、摂食・嚥下診療チームでファイバー・食材とともに各病棟にお邪魔し、患者様を診察させていただくかたちとなります。北海道大学リハビリテーション科同門のリハビリテーション科医長 松尾 雄一郎先生のご指導のもとご迷惑とならないよう一つ一つ努力して参りたいと思ひます。何卒よろしくお願ひ申し上げます。

まいにちから、
まんいちまで。



独立行政法人 国立病院機構

北海道医療センター



●交通のご案内

- 地下鉄東西線**
西28丁目 ●●● ●循環西21 山の手線 北海道医療センター前下車
●●● ●西21 山の手線 北海道医療センター前下車
- 地下鉄東西線**
宮の沢駅 ●●● ●JRバス 西21 山の手線 北海道医療センター前下車
- 地下鉄東西線**
琴似駅 ●●● ●JRバス 琴43 西野中州橋線 北海道医療センター前下車
- JR**
JR琴似駅 ●●● ●タクシーご利用の場合
○JR琴似駅より.....約1,200円前後
○地下鉄琴似駅より.....約1,000円前後
- 車で** ●●● ●旭川・苫小牧方面より自動車ご利用の場合
札幌自動車道新川インターから
新琴似通り経由、山の手通り沿い
●小樽・余市方面より自動車ご利用の場合
札幌自動車道札幌西インターから
北5条手稲通り、新琴似通り経由、山の手通り沿い

北海道医療センター 検索



伊東新院長と共に新年度スタート！

TAKEFREE

- 院長就任のご挨拶 / 伊東 学 02
- 副院長就任のご挨拶 / 川村 秀樹・七戸 康夫 03
- 着任のご挨拶 / 余田 睦美・原田 康司 04
- 認知症患者医療センターを通じて地域の認知症医療への貢献 / 新野 正明 05
- 永年勤続表彰 / 下山 郁美 06
- 今年もはじまりました！～看護師特定行為研修について～ / 上村 雅恵 06
- 第5回連携登録医大会を終えて / 齋藤 啓輔 07
- リハビリ科医師の紹介について 08



院長就任のご挨拶

院長 伊東 学

令和6年4月1日から本院の院長を拝命いたしました伊東学と申します。昨年の10月から副院長を拝命し、ご挨拶をさせていただきましたが、再度ご挨拶申し上げます。前院長の長尾雅悦先生の後任として、本院の院長を拝命するにあたり、その重責を実感しているところでございます。

私は20年以上、北海道大学病院で脊椎脊髄外科医療を担当し、平成26年4月から当院に赴任、多くの脊椎脊髄疾患でお困りの患者さまをご紹介いただき、「最後まで諦めない医療」をモットーに重篤な脊椎脊髄疾患の治療に従事させていただきました。周囲の施設の先生方をはじめ、たくさんの職種の方々から暖かいご支援を賜り、この10年間に約2000件の脊椎脊髄手術を担当させていただきました。これまでの皆様のご支援とご協力に心から御礼を申し上げます。

2024年度の本院が掲げたスローガンは「職員が輝き、地域に頼られる医療の実践」です。1000人を超える職員一人一人の専門性を最大限に発揮するためには、個々の仕事に対するモチベーションの維持が最も重要です。本院は33の診療科が互いに協力しあい、複雑な病態に対応できるように集学的医療を実践しております。3次救急の医療をはじめとする一般的な急性期医療はもとより、筋ジストロフィーや重症心身障害に対する慢性期医療に対する専門的医療も提供し、道外から当院に入院される患者様も増加傾向にあります。また本年度4月1日には、札幌市から「認知症医療センター」の指名を受け、今後大きな課題となる認知症医療の先鞭を担っています。

従来の医療の発展は、各分野の技術や研究の進歩を基盤にしてきたと思います。それにより多くの疾患の治療が長足の進歩を遂げました。これから将来の医療には、それぞれ分野ごとの発展はもちろんですが、それらを融合した集学的な医療を実践することが求められます。個々の疾患を診るから、患者を診る、地域社会を診るといった視点で医療を展開していくことが求められていると考えています。

当院の強みは、経験のある医師から若手の研修医、診療看護師をはじめ、多職種のコメディカルとの連携が密でしっかりしていることと思います。自然災害や新型コロナ感染に対し先陣を切って対応してきた経験を糧に、地域の医療機関で診療が難しい複雑な病態の患者様や、多くの基礎疾患をお持ちの患者様の命と生活を守る機能をしっかりと維持してまいります。引き続き皆様のご支援とご協力をお願い申し上げます。

最後に、過日主催させていただきました連携登録医大会に数多くの皆様にご参加いただきました。この場をお借りして心から御礼を申し上げます。



副院長就任のご挨拶

副院長 川村 秀樹

この度、令和6年4月1日付で副院長を拝命いたしました。当院は地域の皆様にとって健康の拠点であり、地域の皆様の日ごろのご協力のもと、安心して医療を受けられる場としてご支持いただけてきました。北海道医療センターに赴任して5年半となりますが、そのような地域の医療の中核としての役割を果たす病院の副院長に就任しましたことを心より喜ばしく思います。

これまでに歴任した外科系診療部長、手術部長、医療安全管理室長、地域医療連携室長、統括診療部長等から学んだことを生かして、今後も地域の皆様の健康のためにさらに高いレベルの医療を提供し、患者さん、ご家族、地域医療機関の先生方から安心して選んでいただける病院となるよう取り組んでまいります。

今後とも、皆様と共に歩んでいけることを心より楽しみにしております。

令和6年4月より副院長を拝命いたしました七戸康夫と申します。

私は11歳まで山の手で育ち宮の森小学校に通いました。桐生商店(現在のラッキー山の手店)に買い物に行き、坂ビスケットの「しおA字フライビスケット」が大好きなおやつでした。国立病院機構北海道医療センターはその時代から国立札幌療養所としてこの地にありましたが、医師として戻ってくるとは夢にも思いませんでした。

大学卒業後に麻酔科を入り口として救急集中治療医学に従事して参りましたが、道外で勤務していたある日、北海道新聞Web版に「西札幌病院と札幌南病院が統合、国立札幌病院から救命救急センターが移転して新病院に」という記事を見つけました。

医師はどんなことで自分のキャリアに満足感を得られるのでしょうか。手掛けた手術症例数や学位、専門医と言った称号かもしれませんが。しかし救急医としての仕事のアウトカムは「自分の暮らす街をどれだけ安心安全で良い街にするか」です。山の手に救命救急センターが出来る。自分が育った街で救急医としての最後のキャリアを全うして恩返しをしたい、そう思い平成22年3月、開院と同時に赴任いたしました。

この地は自分のルーツの街です。当院にも札幌西高校OBOGや実家住所が山の手研修医がいます。彼ら彼女らが30年後、私と同じ思いを抱いてここに帰って来てくれることを願い、日々診療・教育に励んでおります。これからも住民のみならず、連携医療機関のみならずの助けを借りて、この街を安心安全な街にする仕事をつなげていく所存でございます。今後ともよろしく願い申し上げます。



副院長就任のご挨拶

副院長 七戸 康夫

認知症疾患医療センターを通じて 地域の認知症医療への貢献



臨床研究部長 新野 正明

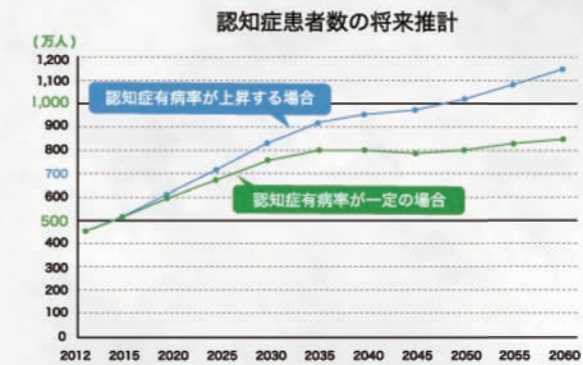
北海道医療センターは、全病床643床・33診療科を備えた総合病院で、神経難病、小児慢性疾患、精神科身体合併症、結核、筋ジストロフィー・重症心身障害などのセーフティネット系医療はもとより、救急救命センターも併設し、札幌市内の3次救急患者の急性期医療にも力を入れています。

日本は高齢化社会に突入し、今後ますます認知症患者が増えてくることが予想されます。認知症は発症後、疾患・患者により様々な経過を経るため、一つの医療機関ですべて診ていくことは難しく、それぞれの医療機関が、それぞれの状況で、連携しながら診療していく必要があります。

北海道医療センターでは、「認知症患者が地域で安心して生活できる」ことを目指して、2016年10月に「認知症疾患診断センター」を開設し、北海道医療センターが提供できる医療を考えながら医療連携を構築してきました。

認知症医療の基本として、まず、認知症が疑われた場合にかかりつけ医から「認知症疾患診断センター」に紹介いただき、診断・その後の道筋を付け、疾患にあわせたアドバイスをを行います。経過の中でさらに認知症の相談や身体合併症治療が必要になったときには、かかりつけ医から再度相談いただき対応、時にBPSD(精神症状・行動症状)で困った場合には、精神科の連携施設との相談や対応依頼を行い、認知症患者のそれぞれの状態に応じた適切な医療を「地域」として提供できる体制作りを目指しています。

今回、令和6年4月に、北海道医療センターは札幌市の認知症疾患医療センターの指定を受け、これまでの認知症診断や身体合併症治療、地域で認知症患者をフォローできる体制作りに加え、新規抗体薬治療を含めた認知症疾患診療の核となるよう、より活動を高めています。



※日本における認知症の高齢者人口の将来推計に関する研究
(平成26年度厚生労働科学研究費補助金特別研究事業
九州大学二宮教授)より作成

4月より看護部長を務めさせて頂くことになりました余田と申します。着任のご挨拶を申し上げます。私は北海道がんセンターに入職しNHOの複数の病院で勤務してきました。北海道医療センターでの初めて勤務は開院時の年度で看護師長として病院の統合、引っ越し、その後一般ICUの開設などに関わらせていただきました。2回目の勤務は副看護部長で胆振東部地震、初めての病院機能評価受審、八雲病院の機能移転、COVID19の対応など様々な経験をさせていただきました。様々な危機、イベントなどもあり病院自体も年月を重ねるごとに力をつけ変化していくを感じています。今回、北海道医療センターに勤務するのは3回目となります。働きやすい環境目指し、また職員には持てる力を発揮し働いていけるよう支援したいと思っております。当院は特定行為研修指定機関でもあり研修にも力を入れております。院内外連携し安心して医療を受けていただき地域に貢献できるよう努めてまいります。どうぞよろしくお願いいたします。

今年4月より事務部長を務めております原田康司と申します。北海道医療センターに勤務するのは初めてとなりますので、どうぞよろしくお願いいたします。私は国立療養所稚内病院(稚内市に平成15年移譲)へ昭和60年に採用となりまして、最北の地で10年間ほど病院事務を学びました。その後、転勤により国立十勝療養所(音更町)、函館病院、北海道がんセンター(国立札幌病院時代にも勤務)、旭川医療センター(勤務当時は国立道北病院の名称)、北海道東北グループ(仙台市_北海道東北ブロック事務所の名称の時代もあり)、山形病院などを2~3年毎に異動しました。これまでを振り返りますと40年間で13回の異動になります。この度は北海道がんセンターから初めての転居が伴わない異動となりました。前出にありますような様々な病院を経験させていただきましたが、セーフティネット医療から高度急性期までも網羅するスーパーハイブリッドの病院に勤務するのは初めてであります。当院がこれらの機能を維持していくためにはどのように健全経営をしていくのか、職員が安全と健康を保ちながら働き続けるためにはどのようにしていくべきなのか、当院が地域の医療を持続的に支えていくためにはどうすればいいのか、基盤の一部分を担っている事務部門の責任者としてより良い病院環境と病院運営となりますよう努力してまいります。



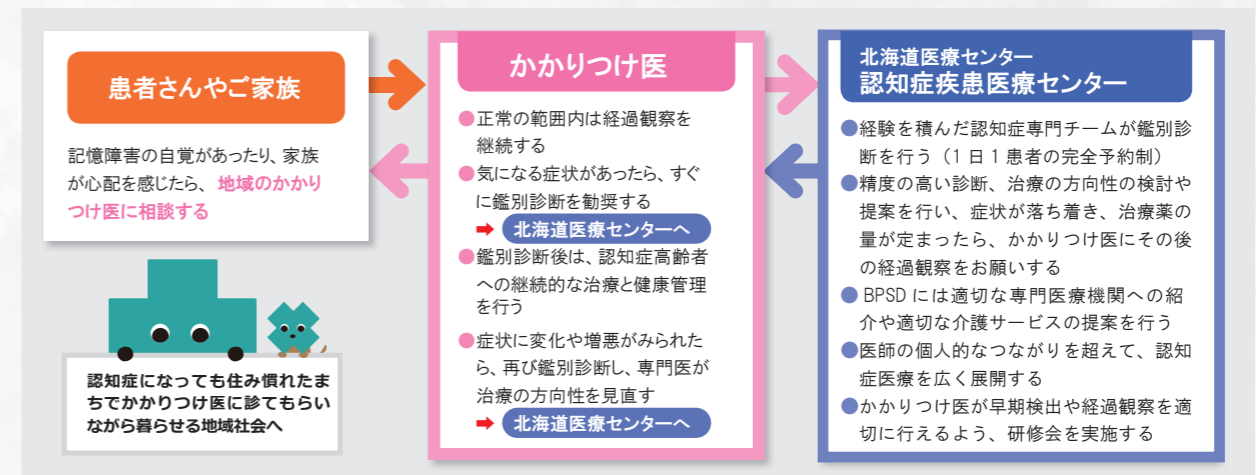
着任のご挨拶

看護部長 余田 睦美



着任のご挨拶

事務部長 原田 康司



永年勤続表彰

職員係長 下山 郁美

新年度もはじまり落ち着いたころ、永年勤続の表彰がありました。永年勤続の表彰を受けられた皆様おめでとうございます。今年、勤続30年10名、勤続20年11名が表彰されました。表彰式では伊東院長より職員に表彰状と記念品が贈呈されました。これまで長く勤めていただいた職員の皆様の頑張りを称えと共に、今後もこれまで培った知識や技術を生かした日々の業務や後進の指導など、あらゆる面で皆様のお力を頼ることになるかと思います。どうか健康には十分に留意していただき、私どもにも末永くご指導を賜れますよう、お願い申し上げます。



今年もはじまりました！ ～看護師特定行為研修について～

副看護部長 上村 雅恵

令和6年4月4日(木)、令和6年度特定行為研修開講式を行い、今年度は第3期生となる8名(院内2名、院外6名)の受講生を迎えました。

本研修では、医師の判断を待たずに、手順書により一定の診断の補助(特定行為)を行うために必要な高度かつ専門的な知識や技術等について1年間かけて学びます。

当院は、患者や地域住民が必要とする医療を安定的かつ継続的に提供していくため、チーム医療の要である看護師が、医療機関や在宅において患者や利用者の状態・状況を自律的に判断し、特定行為の実践も含めた適切な医療を提供することを目指しています。令和4年2月に看護師特定行為研修指定研修機関の指定を受け、現在は在宅・慢性期パッケージを含む7区分13行為の研修を行っています。当院の研修は、受講生が自施設での就労と学習を両立しながら、必要な科目が履修できるよう講義はeラーニングを活用し、演習と実習は集合で行う計画となっております。また症例実習においては、当院または協力施設で実施となります。

今後も地域の医療機関と連携・協働し、地域における医療人の育成に貢献していきます。



第5回連携登録医大会を終えて

地域医療連携係 齋藤 啓輔



6月13日、ホテルニューオータニイン札幌において、第5回北海道医療センター連携登録医大会を開催いたしました。

連携登録医とは、患者さんに一貫性のある医療を提供するために、当院と地域の医療機関が緊密な医療連携を図れるよう医療機関を登録する制度であり、年に一度、連携登録をしている医療機関の先生・看護師・MSW・事務など多職種を招き、症例検討や懇親会を行っています。昨年度は三年ぶりの開催というも相成り、参加者200名の盛大な会となりました。今年も230名の参加申込をいただきました。

周知のとおり、今年度は院長に伊東学先生が就任され、病院幹部が新体制となっております。当院の方針を改めて連携登録医療機関の皆様にお示しするために、今回は、伊東院長より「地域医療を支え期待にこたえる北海道医療センター」、救急部長の裕光司先生より「札幌市の二次救急医療の現状と、今後の展望」のテーマで第1部にご講演頂きました。伊東先生は、当院の機能や担う医療、各部門の紹介、今後のスローガンを熱く語られておりました。少しでも参加された皆様の心に響いていれば有難いことです。裕先生は豊富なデータを用いて札幌市の救急体制についてお話されていました。「救急医療の現状を把握できた」などのお声が聞けて幸いでした。



第2部 懇親会は立食形式としました。今年度より地域医療連携室長に就任された新野 正明先生の「自由に歩き回って活発な交流が見たい」という要望を反映した形です。その想定通り、もしくは想定を超えていたかもしれません。200名を超える参加者があちこちで交流をしている姿は圧巻でした。200名以上収容できる会場がとても狭く感じました。懇親会の中で、診療科紹介を行いました。婦人科・泌尿器科・精神科・認知症疾患医療センター・診療看護師紹介・総合診療部のスピーチは、興味深かったなどの感想が多く寄せられ好評に終わりました。



登録医大会を終えて、この記事を書きながら、参加者のアンケートを回収しているところです。「立食は膝に来た」「食事中に手術の映像をみせるのはいかがなものか？」など、挙げれば反省点は多々ありますが、「顔合わせしてお話できるのがとてもいい機会となっている」、「素晴らしい集まりです。今後も『継続』して開催願います」などのご感想を頂きました。喜んでいただけて何よりでした。

私は、地域医療連携室に異動して三年目となりましたが、地域の医療機関と大切にするべきなのは「顔の見える関係」だとひしひしと感じます。今後もより「密」な関係構築のため、連携登録医療機関・地域の皆様楽しんでもらえるような企画、連携促進に努めて参りますので、機会がありましたら、ご参加の程、何卒よろしくお願い申し上げます。

